

Title	「生産的労働」について
Sub Title	On "productive labour"
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.5 (1952. 5) ,p.315(19)- 344(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19520501-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520501-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

勿論かうした勞作はただ一人の研究者に依つて完成し得るものではない。多數の研究者の協力を俟たなければならぬ。元來思想の問題は人類にとつて最も重要なものであるといへよう。人類の發展は單なる生物的増殖にあるのではない。考へる動物として他の動物と區別さるるが如く、人類は單に自然の展開に従屬して生活する者ではない。自然を思惟し、想定し、批判し、自らの世界を創造するものである。古代における汎神論的神祕思想から近世における科學的合理思想に至るまで、かうした人類の意志的活動のあらはれに外ならない。勿論それらは未だ完全なものではないし、又全實在の部分的解釋に過ぎない。さらにそれらは前述の如く現實の生活に依存する限りにおいて、現實の發展を伴はずしては發展し得ない。しかし同時に現實生活の發展を促進し指導する役割をもつ。それらは不完全なるが故に、しばしば大なる錯誤を生じ、多大の犠牲を生ずることが少なくないが、それらに依つてのみ人類は自己の生活を打開し得るのである。結局するに思想の多様性といふことも、人類が複雑な實在の内容を把握せんとする努力の當然の結果であつて、これを單一の思想に歸一させることは不可能である。

従つて思想史研究においては、一方各個の思想を検討し、それが如何なる現實に對する批判として生じたか、又それが思想自體として如何に展開し、それが現實に對する反映を明かにすると共に、他方においてその社會の全體としての思想の動向を検討し、その思想に依つてその社會の現實が如何に進展させられたかを明かにすることを任務とする。すでに最初に述べたやうに、それらの個のうちには社會の全體の思想に同調するものもあらうし、それに反抗するものもあらう。又全體の思想を誘導するものもあり、全然相容れないものもあらう。それにも拘らずそれらがすべてその時代のその社會における全體思想を形成するものとして、何らかの意義があり、當時の現實——それは又全實在の一つの啓示としての意味がある。

(昭和二十七年四月二日稿)

「生産的勞働」について

遊部久藏

一 「生産的勞働」——古典的確認

二 アダム・スミス——第一及び第二の規定

三 アダム・スミス——第三の規定は存しないか？

人間は生きてゆくためには勞働をしなければならない。勞働による人間にとつて必要なものの生産こそ、「一切の歴史の根本條件」である。このような意味での勞働は、人間と自然との間の一過程、換言すれば人間と自然との間の質料變換の一般的條件である。したがつてそれはいかなる社會形態からも獨立の、むしろいかなる社會形態にも共通の本性を有している。我々はかくの如き勞働過程の主要契機として、人間による勞働と生産手段（勞働對象及び勞働手段）とをあげることができる。もちろんこの場合の勞働を單純に動物的活動と同一視することはゆるされぬ。それはあくまで人間に固有の勞働であり、したがつて合目的な、かくして社會的協働をそれ自身のうちにふくみ、ひいては技術の特有の形態をおびたものである。が、しかし、勞働はかくの如き勞働過程において機能するものとしては、使用價値の生みの親としての勞働であり、W・ベティの「勞働は富の父であり、土地はその母である。」にいわゆる勞働である。そのかぎりにおいて使用價値そのものの無規定性に關聯對應する勞働過程そのものの無規定性がみ

とめられる。

このような「單純な労働過程の立場」^(註1)において、まず、生産的労働の最初の規定——本源的規定がえられるのである。即ち労働は、それが人間生活の永遠的自然條件たる労働過程において機能するものとして、換言すれば、人間の欲望の自然的対象、使用價值一般を生産するための合目的な活動として、生産的労働とみなされる。

が、さきにも述べた如く、人間の労働の本質に社會的協働の存在をみのがしがたいことから察せられる如く、労働過程はその眞の實在においてはそれぞれの時代において特定の歴史的な形態をおびてあらわれる。かゝる形態を根本的に規定するものは社會的協働によつて必然的に要求される労働と生産手段との特殊の結合の様式であろう。いま我々は他の社會形態については問わない。現在の我々の生活している資本主義社會について注目すれば、そこにおいては、一方の側に自由な労働力の所有者としての賃労働者階級、他方の側には生産手段の所有者としての資本家階級が存在しており、かくして剰餘價値の生産と蓄積とを唯一の目的として生産がいとなまれているのを見出すであろう。かくして資本制生産過程は、労働過程と價值増殖過程との統一として存することとなる。こゝに、さきの「單純な労働過程の立場」は具體化され、そのような意味で修正され、ひいては、生産的労働の概念規定も變容を蒙らざるを得ない。即ち資本制生産の本質が剰餘價値の生産にあるかぎり、「労働者が一般的に生産するというだけでは、もはや充分でない。彼は剰餘價値を生産せねばならぬ。資本家のために剰餘價値を生産する労働者、即ち資本の自己増殖に役立つ労働者のみが生産的である。」^(註2) かくしてさきの労働過程そのものに基礎をおく廣義の生産的労働の概念は、特殊資本制的形態規定を蒙り、独自の歴史的な性格を有することとなる。しかしながら、さればといつて、さきの生産的労働の本源的規定がこの場合において無意味となるのではない。それはあたかも労働過程の一般的本性そのものが

資本制生産過程においても變化しない如くである。たゞそれは後者の場合においてもそうであるが、より複雑な關係のうち自己を止揚しているとみられ、しかもそこにおいては、一箇の顛倒——quid pro quo(一物と他物との置換え)が生じるのである。本來的なるものの、その假象の背後への追拂いが、虚偽なるものによる眞實の替稱がみられる。これは労働過程が資本制生産過程においては、價值増殖過程の單なる物質的基礎として、目的に對する手段としてのみ意義を有することを根據とし、資本制生産過程の成果たる商品においてその使用價値が剰餘價値の質料的擔い手としてのみ意義を有することに對應する。されば生産的労働の概念の確立のためには、このような全面的把握を——たとえ資本主義的労働の理解のためにも——必要とする。けれども經濟學研究のためにさしあたり課題とされるものは、いうまでもなく、生産的労働の一般的规定ではなくして、その特殊歴史的な資本制的规定である。しかるに剰餘價値の生産は絶對的及び相對的の兩形態を採つて行われ、しかもそれらのそれぞれの根柢にあるものは労働の資本のもとへの形式的及び實在的包攝であるが、生産的労働を眞に資本制的に特徴づけるものは、その後者は相對的剰餘價値の生産及び労働の資本のもとへの實在的包攝である。蓋し後者においてはじめて剰餘價値の生産が労働過程の技術的及び社會的諸條件の、ひいては生産様式そのものの變革(資本制單純協業を始點とする變革)を必須化するがゆえに、それこそ本來的の意味で資本制的生産様式を内含すると云いうるからである。^(註3) かくの如き生産的労働の限義の規定はまた、資本制生産過程における他の顛倒形態、労働の生産力の資本の生産力としての現象が相對的剰餘價値の生産(労働の資本のもとへの實在的包攝)においてはじめてみられることとも照應するであらう。

生産的労働と不生産的労働との區別は、かくして、全く資本の立場において、あるいは資本の人格化としての資本家の立場においてのみ問題とされるところであり、こゝに前記、労働力の價値を回収するだけの労働は(労働者

にとつては、生産的であつても、資本家の立場から不生産的と見做される。「生産的労働と不生産的労働との間の區別はこゝにおいては、たゞ貨幣所有者、資本家の立場からのみなされて、労働者の立場からばなされてない。」^(註4) 總じて生産的労働とは直接に資本と交換される労働($G-W_{A}^{P} \dots P \cdot W-G$ におけるA)である。これよりして不生産的労働の意義もおのずから明白であろう。それは直接に、資本に對してではなく、収入に對して交換される労働である。収入、換言すれば賃銀、利潤、利子、地代、及び上記の収入より分岐せる収入の諸形態と交換される労働である。

だからして、生産的労働及び不生産的労働の區別は、労働の具體的・有用的形態とも、また労働の生産物の性質(使用價值)ともまつたく無關係である。それというのも、資本主義的労働の概念は、さしあたり、労働過程ではなくして價值増殖過程のみかゝるからである。されば同一の種類の労働が資本と交換されるか、あるいは収入と交換されるかによつて、生産的労働とも不生産的労働ともみなされる。^(註5)

だが、資本制生産が發達するにつれて、しだいに生産的労働と不生産的労働との素材的區別があらわれる。かくして僅かの例外を無視すれば、生産的労働はもつぱら商品、しかも物質的な商品——但し労働力以外の——の生産に向けられた労働であり、不生産的労働は同じく僅かの例外を無視すれば、個人的労働給付(Persönliche Dienstleistung)であるかのようにあらわれる。即ち、資本制生産の支配化にもなつて、収入は一般にそれが労働に對して交換されるかぎり(収入の他の部分は使用價值として用いられるべき商品と交換されるが)、商品を生産する労働ではなくして、單なる労働給付(それ自身使用價值として消費されることのサービス)に對して交換されることとなる。で、こゝに、現象形態のみをながめるかぎり、個人的労働給付は不生産的労働であり、他方、商品を生産する労働は生産的労働であると

いう區別があらわれる。もちろんこれは原理的區別ではない。(さきに「僅かの例外を無視すれば」といつたが、かかる例外を設定しなければならぬ點に、それがらがわれよう。)しかしこの點を充分念頭におけば、一應、區別としての意義をもちうるのである。かくして、こゝに、資本制的形態規定のうちにおいても、生産的労働の別箇の規定、即ち單に商品を生産するものとしての生産的労働の規定が浮き上つてくるが、商品が資本のエレメンタルな形態である如く、商品を生産するものとしての生産的労働の規定は資本を生産するものとしての生産的労働の規定に對してそのエレメンタルな段階を示している。^(註6) したがつて商品を生産するものとしての生産的労働の概念は、資本を生産するものとしての生産的労働の概念のうちにさきの生産的労働の本源的規定と同じく、但し稍々異つた意味において——というのは、本源的規定には商品乃至價值の規定を缺くが故に——包攝され止揚されているといえよう。このことは資本制生産過程のうち単純な商品生産過程が包攝され止揚されていること——というのは、資本制生産過程は前述の如く労働過程と價值増殖過程との統一であるが、價值増殖過程それ自身はある特定の點(必要労働時間)以上に延長された價值形成過程にほかならない。それは價值形成過程のいわば轉化形態としてその特殊資本制的に具體化するものである。しかるに労働過程と價值形成過程との統一こそ商品生産過程であるから、それは資本制生産過程の從屬的契機であるとともにまた、エレメンタルな契機であるともいえよう。——と、關聯し對應する。

なお、こゝに附言すれば、資本制生産過程において労働過程が價值増殖過程の擔い手化し、かくして資本制商品(商品資本)においては使用價值が剩餘價値の擔い手化しているが故に、一般に資本制生産過程において機能する労働を以て、價值を増殖する労働、剩餘價値を生産する労働と簡略的に表現しえた如くに、單純な商品においても、労働過程は價值形成過程の擔い手化し、かくして商品(單純商品)においては使用價值が交換價値の擔い手化している

がゆえに、一般に商品を生産する労働を以て、価値を生産する労働と簡略的に表現しうるであらう。この兩者はいずれも生産的労働に關する一箇の歴史的规定(商品乃至資本の形態規定)をいみするが、はじめにのべた生産的労働の本源的规定はかゝる歴史的规定の外にあるもの、価値形成に増殖過程の擔い手化する以前の労働過程(いわば即自的労働過程)にかゝわるものである。かくして我々は生産的労働に關して三つの規定をえた。第一に剰餘価値を生産するものとしての、第二に価値を生産するものとしての、第三に使用価値そのものを生産するものとしての(註7)以下、我々は、かくの如き規定を基準として、アダム・スミスの生産的労働の概念について稍々立入つて考察したいと思う。

(註1) K. Marx; *Das Kapital. Volksausgabe besorgt von M.F.J.-Institut.* Bd. I. 1932. S. 189. 長谷部文雄氏訳。日本評論社版、四八五頁。S. 533. 譯「一四九頁。以下、*Kapital*と略稱す。

(註2) *ibid.* S. 534. 譯「一五一頁。

(註3) 「かくして相對的剰餘価値の生産は一の獨自的・資本制的な生産様式を内蔵するのであつて、この生産様式は、その諸々の方法・手段・および條件そのものとともに、最初には資本のもとへの労働の形式的包攝の基礎上で、自然發生的に發生し且つ發達させられる。形式的なそれに代つて、資本のもとへの労働の實在的な包攝が生ずる。」(*Kapital* S. 535. 譯「一五二頁。)

(註4) K. Marx; *Theorien über den Mehrwert. herausgegeben von K. Kautsky.* Bd. I. 1923. S. 260. 向坂逸郎氏譯、二六七頁。以下、*Theorien*と略稱。

(註5) 具體的諸事例——役者(*Theorien. Bd. I. S. 259, 273.*)。裁縫師(*SS. 259-260.*)。料理人、給仕(*S. 261.*)。ピアノ製造者(*SS. 263-4.*)。著述家(*S. 260, 416.*「直接的生産過程の諸結果」。「マルクス・エンゲルス選集」第九卷、四四七頁)。歌女、教師(「諸結果」四四七頁)をみよ。しかるのち、この點についてのマルサスのあやまれる見解を批判せよ。T. R. Malthus; *Principles of Political Economy.* 1st. Ed. 1820. Pp. 41-3.

(註6) 「商品はブルジョアの富の最もエレメンタールな形態である。『生産的労働』が『商品』を生産する労働であるという説明は、したがつて、生産的労働が資本を生産する労働であると説明する立場より、ずつとエレメンタールな立場に相應する。」(*Theorien. S. 230.* 譯「二八四頁。)

(註7) このような生産的労働の三つの規定とその相互連關がマルクスによつて明示されているわけではない。彼はまず『資本論』第一卷第五章第一節において第三の規定、第一四章において第一の規定を掲げている。又、『剰餘價值學說史』第一卷第二章五及び附論、及び『直接的生産過程の諸結果』を参照せよ。本文の展開は、これらの典據を基礎として私の解釋したところであるが、解釋の立脚點については拙著『價值論と史的唯物論』第一及び第四章を参照されたい。小論はその具體化である。(なお田中菊次氏「生産的労働の概念」東北大學研究年報「經濟學」第一七・八合併號参照。H. Denis; *La Valeur.* 1950. における説明「Chap. IV」はマルクスの立場に立つものでありながら、かかるものとして不十分な展開である。)

II

スミスは『國富論』第二篇第三章の冒頭に曰く「労働には、それが加えられる對象の価値を増す (add to the value of the subject) 種類と、さういふ結果を生じない種類とがある。前者は、価値を生ずる (produce a value) のであるから、これを生産的労働 (productive labour) と呼び、後者はこれを不生産的労働 (unproductive labour) と名づけてゐる。かくして、製造工 (manufacturer) の労働は一般に、彼が工作する材料の価値に、彼自身の生活維持手段 (his own maintenance) と彼の主人の利潤との価値を附け加える。これに反して僕婢 (menial servant) の労働は、いかなる価値をも附け加えない。製造工はその賃銀を彼の主人から前貸して貰つてゐるのであるけれども、それらの賃銀の価値は一般に、彼が労働を加えた對象の増大した価値の内に、一定の利潤を伴つて回収せられるので

あるから、實際上は、主人には一文の費用もかゝらないのである。しかしながら僕婢の生活維持手段は回収されることがない。人は多くの製造工を使うことによつて富み、多くの僕婢を維持することによつて貧しくなる。^(註8)

この第一の文章のうちに我々はスミスが生産的労働を以て労働の結果、労働者の生活維持手段以上に「彼の主人の利潤の価値」を附加するものとして正しくとらえているのを見出す。しかもスミスは、こゝにおいて、生産的労働を以て一般に「価値を生ずる」労働とも解しているのを見る。がともかく、もろ一つ、スミスによつて第一の正しい規定が端的に示されている文章を引くとしてしよう。

「しかしながら、もしも不生産的労働者によつて右の如く消費されただけの食料及び衣服の量が、生産的労働者に分配されたとしたならば、彼等はこの消費した全価値を再生産すべくしかもなおそれに利潤を伴うであらう。^(註9)

更に資本と直接交換される労働が生産的労働であつて、収入と直接交換される労働が不生産的労働であることは、スミスによつて次の如く——稍々不正確ではあるが——のべられている。

「ある國の土地及び労働の年々の生産物にして、資本の銷却に當てられる部分は、直接に生産的労働者でない者を維持するためには決して使われない。それは生産的労働の賃銀のみに支拂われる。しかし、利潤として又は地代として、直接に収入となる筈の部分は生産的・不生産的の區別なく兩種の労働者を維持する。

ある人がその貯財の一部を資本として使用するとき、その高はどれほどであるにしても、彼は常にそれを回収した上なお利潤があることを期している。故に、彼はそれを生産的労働者のみを維持するのに使用する、そしてそれは、彼に對して資本としての役目を果たした上で、彼等労働者の収入となるのである。もし彼がその一部を何か不生産的労働者を維持するために使えば、この部分は、その瞬間から、彼の資本の内からとりのぞかれ直接の消費のために留保される貯財の内に加えられるのである。^(註10)

れる貯財の内に加えられるのである。^(註10)

かようにスミスが生産的労働と直接に資本と交換される労働とみたことは、「彼の最大の科學的貢獻の一」である。^(註11) 蓋しマルサスの正當にもつていふように、^(註12) 生産的及び不生産的労働の區別こそ經濟學にとつて不可欠の前提であるから、その正しい規定は斯學に要請された焦眉の課題なのである。

だが、スミスは前述の如く總じて価値を生産する労働をも生産的労働とみている。^(註13) しかし価値のみを生産する労働者は資本主義的意味において生産的労働者とは云えない。これは實在的には、必要労働時間以上に働かぬ賃労働者であるが、かくの如き賃労働者は賃労働の本質にもとるものであつて、元來ありうべからざることである。したがつてこの場合、価値を生産する労働が生産的労働としてみとめられるのは、剰餘価値をも當然そのうちに含むものとして豫想される價值一般を生産するものとして、かくの如き本來の資本主義的労働からの一箇の論理的抽象としてのみゆるされる。(この場合には、賃労働者は資本「商品資本」の生産者としてではなく、單に商品の生産者としてみなされる。) さきに第二の規定が第一の規定に對してエレメンタルな位置に位すると云つたのは、この意味(論理的意味)においてである。がこゝにあらためて實在的問題とされるのは、資本主義社會において實際に單純商品生産者として存在する者、例えば農村における獨立自營農民や都市における手工業者などである。彼等はたしかに商品を、したがつて価値を生産するも、剰餘価値を生産しないから、その労働は生産的労働とは云えない。蓋し、かゝる場合には、この種の範疇は——資本も賃労働も存しないから——問題とならないのである。けれども資本主義生産の發展するにつれて、換言すれば、それが生産過程の一般的な、社會的に支配的な形態となるに比例して、この種の生産者たちは資本主義的社會經濟構成に對してウクラードとして從屬するにいたり、こゝに事實上 (in der That) 生産的労働の概念の想定が

(註14) 許容される。かくして、賃労働者については一箇の論理的抽象(エレメンタルな規定)として、また獨立小生産者については一箇の擬制として、しかしともかく、總じて商品を生産する労働は、生産的労働である。とかの第二の規定が成立する。がスミスが商品(及び價值)を生産する労働をみなして生産的労働としたのは、もとよりこのような深い理解に立脚するものではない。むしろこの第二の規定においてはスミスは第一の規定における本質洞察的・大乗的マジョリティな行き方に對して現象記述的・小乗的マイノリティな行き方を採用していると云える。というのは、前節にのべたように資本制生産の發展するにつれて、生産的労働と不生産的労働との素材的區別がハッキリあらわれてきて僅少な例外をのぞけば、前者は商品を生産する労働、後者は個人的勞務給付というかたちをとつてくるために、スミスはこの現象形態をありのままに祖述しているのである。いわばこゝでは二つの規定が絡み合い交錯しているのである。

が、こゝに一箇の問題がある。では、はたして、スミスのみとめた生産的労働の規定は第一及び第二のものだけであらうか? かの第三の規定は、彼においては存しないのであらうか?

我々はこゝにあらたなる引用をスミスから行うとしよう。(それは本節の最初に引用した文章につづく文章である。)

「と云つて、後者〔奴婢—遊部註。以下Aとするす。〕の労働も價值があるのであつて、それに對する報酬は前者〔製造工—A〕と同様に當然のものといわなければならぬ。たゞ、製造工の労働は、ある特定の對象又は賣却し得べき商品に固定し且つ實現されて (fix and realize itself in some particular subject or vendible commodity) 其の労働がなされた後にも少くとも暫くは無くならないのである。それは、いわば、いつか必要が起つたときに使うために貯藏し、蓄積しておかれる一定量の労働である。この對象は、或はそれと同じものであるが、この對象の價格は、後

日、必要に應じてその生産にはじめに要した労働と等しい量の労働を動員することができるのである。これに反して、奴婢の労働は、ある特定の對象又は販賣しうべき商品に決して固定又は實現するものではない。彼のサービスは一般にそれを仕遂げた瞬間に消失するのであつて、減多にその足跡又は價值をその背後に残さない、そして後日、その代りとして同量のサービスを獲得するというようなことはできない。

社會の最も尊敬すべき階級に屬する人々の内でもある人々の労働は、奴婢の労働と同様に、少しの價值をも生産せず、その労働が終つた後にもなお残つていて、その代りに同量の労働が後日得られるというような永續的對象 (permanent subject) 又は賣却しうる商品に固定し又は實現することがない。(註15)

スミスはそこで、かくの如き不生産的階級として君主、司法及び軍務の全官吏、全陸海軍人をあげ、更にこれと同じ階級に屬するものとして、牧師、法律家、醫者、各種の文人の如き莊重且つ重要な職業や俳優、道化役者、音楽家、オペラ・シンガー、オペラ・ダンサーの如き微賤な職業をあげている。しからは、スミスによつて生産的階級とみなされた職業はいかなるものか?

彼は、第二篇第五章において生産的労働の維持に充用される資本の四用途として、(一)粗生産物の獲得(土地、鑛山、漁場の改良または耕作)、(二)製造業、(三)運輸(卸賣商)、(四)分配(小賣業)をあげている。(しかしこのうち(四)については考慮すべき點—蓋しその部門における「純粹の流通費用」は決して價值を形成しないから—があるが、いまこの點にふれな

50)

右の一文において、スミスが生産的労働を商品に價值を生産する労働とみなし、不生産的労働をしからざるものとみなしていることはあきらかである。しかしこゝに問題とされるのは、スミスが労働の生産的及び不生産的の區別の

要點として、「ある特定の對象又は賣却しうべき商品」あるいは「永續的對象」に「固定し又は實現すること」をあげていることである。もちろん、この場合このような意味での生産的労働を物質的對象あるいは有形財を生産する労働と解する立場はあまりに形式的、皮相的である。むしろそれはJ・S・ミルの見解であり、マルサスですらこれのみを固執するものではない。^(註18)それはスミスの眞意から遠いのである。しかるにこゝに第二の規定のみをみるという立場がマルクスによつて行われている。いまこのそれ自體としては正しい見解をあとすけるとしよう。

一 資本主義社會における商品の世界は二大範疇に分かれる。一は労働力、一は商品自身。(もちろんスミスには労働力という觀念は實際なく労働という觀念しかない。)したがつてひろく、商品を生産する労働を生産的労働とみなすならば、奴婢の如きものの労働力を——というのは、一般に労働力が商品形態をとつていた當時においては、かゝる者も労働力を有し、したがつて「商品」を有するとみなされたがゆえに——生産(再生産)する労働即ち奴婢の労働をも生産的労働に含むこととなる。かくしてスミスによつて商品自身を生産する労働に生産的労働の意義が限定され、一般に勞務給付を行うものは不生産的労働者とみなされることによつて、例えば劇場企業家に對する役者の労働の如く勞務給付にして生産的労働なるものが生産的労働者の名簿から脱落してしまつた。しかしこゝで重要なのはスミスのかゝる誤謬のうちひそむ「正しい本能」である。^(註20)

二 スミスが永續的對象に商品を生産する労働を以て一般に生産的労働とみなしたのは、これによつて農業労働だけを生産的労働とみなす重農學派を批判するためである。しかも一般的に云つて、スミス自身、重農學派の長所として、「國民の富は貨幣という消費しえない富ではなくして、その社會の労働によつて年々に再生産されるところの消費物であるとしたこと」^(註21)をあげていることからもうかがえる如く、この種の規定は重農學派にその「由來」をもつて

^(註22) いる。そのような意味でスミスの永續的對象を生産する労働に生産的労働の規定は重金主義に對立するものであるが、しかもそれでいて、それは一面、重金主義への後退をも示している。即ち資本主義黎明期の理論家にふさわしく、重金主義者が「交換價値の純粹な・手で把むことのできる・燦爛たる形態」^(註23)「貨幣(金銀)に固執し、したがつて貨幣を一國にもたらすような労働のみを生産的労働とみなしたのであるが、スミスはこれを一般商品にまで擴充した。これは偉大な進歩にはちがいない。しかしかゝる進歩の背後には重金主義的觀念がひそんでいる。即ちスミスは一般商品のうちに貨幣性質(Geldcharakter)をみぬいていたのである。即ち重金主義者が金銀という交換價値の唯一絶對の獨立的存在にしがみついていたのに、スミスは交換價値の擔い手としての商品(單なる使用價値物ではなくして)に注目した。いわば一般商品のうちに潜在的貨幣の姿を見出したのである。「あらゆる商品はそれ自身において(an sich)貨幣である。A・スミスが、これを以て同時に多少とも『恒續性』、事實上『不滅性』の重商主義的觀念に逆戻りしているということは、見誤りえざることである。」^(註23)

スミスにおける前進と退歩、その複雑な様相はかようにマルクスによつてするどく指摘された。しかしそれは全く、スミスのいわゆる「永續的對象」を商品形態において、即ち商品として理解する立場においてなされている。この點を留意せよ。しかも今日、スミスをあらためて問題とする場合、このような見方——前述の如くそれ自體としては正しい——も一箇の反省にあたらないであろうか? この點が次節の課題である。

(註20) A. Smith: An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations, edited by E. Cannan. Vol. I.

P. 313. 大内兵衛氏訳、第二分冊、一〇五頁。以下 Wealth. と略稱。この文章の後段は、マルクスによつてスミスの剩餘價値論の「典據として引用されてゐる。Kapital. Bd. I. SS. 372-3. 譯、六九八—九頁。

「生産的労働」の意味

三二 (三二六)

(註6) *ib. P. 322.* 譯 第二分冊、一二二頁。なお、*P. 320.* 譯、二二八—九頁参照。
(註10) *ib. P. 315.* 譯 第二分冊、一〇九頁。なお後段の文章は、マルクスによつて(註8)中の一文とともにスキスの剰餘價值論の典拠とせらる。Kapital, Bd. II. SS. 372-3. 譯、六九八—九頁。又、そこに資本家の有する貨幣が二度機能するかの如くに入らるるが、實は貨幣ではなくして労働力が二度(はじめは商品として、つぎに「生産」資本として)機能する。ib. SS. 383-4. 譯、七一—九—二〇頁。

(註11) Theorien, Bd. I. S. 259. 譯、二六六頁。もつとも、これはスキスとかぎらず、古典經濟學の根本特徴でもあつた。曰く「古典經濟學は昔から、剰餘價值の生産を生産的労働者の決定的性格たらしめた。」(Kapital, Bd. I. S. 534. 譯、一一五一頁。)しかるに、ギンズバウグは、「スキスは、すでに富が労働から生じるといふ理論をすすめるに於いて最初の者ではなかつた。中世の教會牧師や一七世紀の哲學者は労働價值論を發展させた。けれども、スキスは生産的労働の概念の周圍に完全な經濟思想の體系を建設することにおいて新たな根拠を押し入れた。」(E. Ginzburg; The House of Adam Smith. 1934. Pp. 48-9.)とのべているが、しかし彼のいわゆる「生産的労働の概念」とは右の文章から、及びつづく文章において『國富論』冒頭の一句が引用されていることから、推察される如く、II 有用の労働の意である。又、ニコルソンは『國富論』における dominant conception とし「労働」をあげてゐるが、「生産的労働」については、同じくこれをII 有用の労働と解してゐる。(J. S. Nicholson; A Project of Empire. 1909. Pp. 24-5.)

(註12) T. R. Malthus; The Principles of Political Economy, 2nd Ed. 1836. P. 36. 吉田秀夫氏譯、上卷、五七—八頁。
(註13) それは本節冒頭に引用した文章にもうかがえるが、第四篇第九章重農主義批判の第一論點に明白にあらわれている。即ちスキスはそこで商工業部門における労働は剰餘價值をうまず、労働力の價值を回収するだけであるという重農主義的前提の上でたつと、しかもこれを以て剰餘價值をも生産する農業労働とともに生産的労働とみなしている。かくして剰餘價值生産II 生産的労働の正しい規定を彼自身つがえしてゐる。

(註14) 「資本主義的生产方法においては、獨立の農民または手工業者は二つの人格に分けられる。生産手段の所有者として彼資本家であり、労働者として彼は彼自身の賃銀労働者である。それ故に、彼は自分に對して自分の労働賃銀を資本家として支拂う。そして彼の利潤を彼の資本から得る。即ち、彼は自分自身を賃銀労働者として搾取し、また労働が資本に對して支拂わなければならない貢納を剰餘價值で自分に對して支拂う。おそらく彼は、又第三の部分に土地所有者として自分に支拂う。(地代)」(Theorien, Bd. I. SS. 422-3. 譯、四二二頁。なお『直接的生産過程の諸結果』、四四五頁参照。)かくして、實際上、資本關係は存しないが、事實上、かかるものが存するかの如くに理解され(auffassen) 假定され(supponieren) そのかぎりたゞ正當な(Gmit Recht) である。「このことは資本主義的生产方法の支配する社會形態における傾向(Tendenz)である。」(S. 425. 譯、四二二頁。)かくして、「資本制生産によつて支配されてゐる社會狀態の内部では非資本家的生産者も資本家的表象によつて支配されてゐる。」(Kapital, Bd. III. S. 60. 譯、一二五頁。)

しかるに、我々がスキスによつて感歎するのは、彼がかくの如き、「中間諸形態」(「資本制生産様式」の過渡) (Kapital, Bd. I. S. 535. 譯、一一五三頁。)において成立する、「資本家的表象」に氣付きこれを指摘してゐることである。彼は『國富論』第一篇第六章において云う。自ら手を下して耕夫、鋤夫としてはたらく「普通の農業者」(common farmers) の所得や、充分の資本を有する「獨立の製造業者」(independent manufacturer) の所得は利潤とみなされてゐるが、そのうちには賃銀が含まれており、この場合には賃銀が利潤と混同されてゐる。又、「彼の花園を彼自身の手を以て耕す園丁(gardener) は、彼の一身に地主、農業者、及び労働者の三つの異つた資格(three different characters) を結合してゐる。それ故に、彼の生産物は彼に地主の地代、農業者の利潤及び労働者の賃銀を支拂うべき筈だ。しかるに普通にはこの全部が彼の労働の所得と考えられてゐる。この場合には、地代と利潤とが賃銀と混同されてゐる。」(Wealth, Vol. I. P. 55. 譯、第一分冊、一一—一二頁。なお、PP. 67-8. 譯、一三三頁参照。)

(註19) Wealth, Vol. I. Pp. 313-4. 譯 第二分冊、一〇五一—六頁。なお第四篇第九章の重農主義批判の第二論點をみよ。Vol. II. P. 173. 譯 第三分冊、四五六頁。

「生産的労働」について

(註16) スミスの生産的労働の規定のうちに物質的対象を生産する見解を見出す學者はかなり多数に上る。例えばリスマー (Charles Rist) は「スミスより一文——「彼〔僕婢—A〕のサービスは一般にそれを仕送げた瞬間に消失するのである。」「云々」——を引いて曰く「かくの如く、生産するという言葉のいみを、物質財 (objets matériels) のみならず、無形のサービス」は生産的労働と不生産的労働とについてかなり無用な一論争を惹起せしめた。」(Gide et Rist; Histoire des Doctrines économiques, 1947, P. 69.) アモンも、スミスはマーカントイリスットの意見に倣つて富り有形財とみなし、有形財の獲得に向けられる労働は生産的とみなしたとする。『正統派経済學』(二二—三頁。) リストやアモンと同じ解釋を、我々はキャンナンにせよとみる。(E. Cannan; A History of the Theories of Production and Distribution, 1924, PP. 18-24.) 彼によればスミスは第一篇では富を物質的対象 (material subjects) に限らなかつた。(しかしその論證 [PP. 18-9.] は先分納得せしめるに足らない。) しかるに第二、第四篇を書く前にスミスはフランス重農主義の影響を蒙つた。そして富を capital wealth とみなすにいたり、したがつて耐久的性质を有しないものの生産に使用される労働を一般に「不生産的」とみなした。「スミスがあやまつて一國の富が資本本あるいは所得をいみするとみとめたことは、生産的及び不生産的労働についての論争がひきのばされたところの長きについで大いに關係している。」(P. 18.) キャンナンはスミスからすでに我々にとつておなじみの文章をいくつかひくが、彼はスミスの生産的労働に關する全規定を物質的対象の生産に收約しようと考えているかの如くである。曰く「あきらかに彼〔スミス—A〕に眞實に感ぜられたものは、『不生産的労働』の生産物の無價値なること (valuelessness) ではなくして、その持続 (duration) の缺如であつた。『不生産的労働』は『労働が終つた』のちにもなおのこととして、『その代りに同量の労働が後日得られるというふうな』なんらかの永續的対象又は賣却しうる商品に固定し又は實現することがない。また「社會の capital wealth に關しては、永續的対象あるいは賣却しうる商品を生産する労働とその生産の瞬間に消失するところの物を生産する労働との間のこの區別は決して不合理ではない。その生産の瞬間に消失するところの物は決して一國の capital wealth の一部分を形成しえない。……』」『不生産的』労働は、一國の資本の一部分を、そ

れらが存続するかぎり形成するところの諸物を人々が生産するのに屢々助力するかもしれぬが、それは直接且つ即時にかくの如き物を生産しなす。」(PP. 22-3.) ——キャンナンの批判は後註(註22) 参照。ロールは、スミスの生産的労働の定義を三つあげている。即ち我々の第一、第二の規定のほかに物的財貨の生産をあげている。即ち彼は、スミスのいわゆる「ある特定の對象は賣却しうる商品に固定し且つ實現されている」労働を以て、「結果として物的財貨をもたらすような活動」と解して云ふ。(Erich Roll; A History of Economic Thought, 1951, PP. 170-1 岡谷三喜男氏譯「二四—六頁。」)

(註17) J. S. Mill; Principles of Political Economy, 1848, Bk. I, Ch. III, Essays on some unsettled questions of Political Economy, 1844, Essay III.

(註18) F. R. Maitland; Principles of Political Economy, 1st ed. 1920, 2nd ed. 1936, Ch. I, Sec. II.

(註19) スミスによるこの點の洞察は(註15)に所在を示した文章の冒頭の一句「と云ひ」後者〔僕婢—A〕の労働も價值があるであつて、それに対する報酬は前者〔製造工—A〕と同様に當然のものといわなければならぬ。」を、「これ等〔不生産的労働者—A〕のうち最も卑賤なものも労働も一定の價值をもち、その價值は凡ての他種の労働の價值を規律すると同じ原理によつて規律せらるる。」(Wealth, Vol. I, P. 314, 譯「第一分冊」一〇七頁。)と示されし云々。Theorien, Bd. I, S. 262, 譯「二六九頁。『直接的生产過程の諸結果』」四四三—四頁。

(註20) Theorien, Bd. I, SS. 277-9, 譯「二八二—四頁。

(註21) Wealth, Vol. II, P. 176, 譯「第三分冊」四六一頁。

(註22) Theorien, S. 280, 譯「二八五頁。

(註23) ib. S. 281, 譯「二八五頁。

III

「生産的労働」について

我々は第一節において生産的労働に三つの規定が存することを確認し、第二節においてスマイスについて第一、第二の規定の存在を見出した。しかし、それで問題なくすめばこのあたらしい第三節は不必要なのである。しかし前節のおわりの部分で指摘した如く、それだけでは足りる——と考えられる——ものがあるのである。といつて我々はスマイスのいわゆる「永續的對象」を通俗學說史家の如く有形物とか物質物とか解しようとするのではない。この種の解釋がいかにも淺薄にして唾棄すべきものであるかは、これを商品形態に翻譯するマルクスの深い洞察が示している。しかもいまこのマルクスの見解——というよりは後述の如く敘述の仕方なのだ——にのみ即しがたいとはななを意味するのであらうか？

我々はこゝに一文を引く。それは『國富論』冒頭の序論中の一句である。

曰く「ある國民において、その労働の適用上における熟練、技巧及び判斷の實狀がいかようであれ、同じ狀態がついてゐるかぎりにおいては、その國の年々の供給が充分であるか不十分であるかは、年々有形的なる労働に使用されてゐる人の數とそういう労働に使用されていない人の數との割合に、依存せざるをえない。有形的にして生産的な労働者の數は、後に明らかになるように、如何なる場合においても、彼等を働かせるために使われるところの資本的貯財 (capital stock) の量と、それが使用されるところの特殊な方法とに比例するものである。」^(註24)

この一文中の「有形的にして生産的な労働者」(useful and productive labourers)の語に注目せよ。もちろんこれは單なる文義的せんさくのためにする考察ではない。この一文のおかれた地位よりこの言をなすのである。周知の如くスマイスはこの「序論」の劈頭において、「すべての國民の年々の労働は、本來その國民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便益品とを供給する資源であつて、その必需品と便益品とは、この労働の直接の生産物であるか、

あるいは、その生産物を以て他國民から購入した物である。」^(註25)とのべてあり、そこにいわゆる労働とはいふまでもなく富の源泉としての労働である。したがつてこゝに問題とされるのは、この富の形態をスマイスがいかに解してゐたかである。富、これはいふまでもなくそれ自身としては無規定的な概念であつて、それが經濟學の論理の素材となるためには、その特定の歴史的形態規定においてなされねばならない。それはあきらかに資本主義社會においては、資本たるであらう。あるいはそのエレメンタルな形態としての商品たるであらう。(マルクスの商品分析の意義をこゝで想起せよ。)しかるにスマイスはそこに、「生活の必需品と便益品」といふ。そして富裕の程度は實際上利潤率がこれを示すにかゝらず、スマイスは國民數に對する富の、生活必需品、便益品等の割合を考へてゐる。^(註26)これは歴史的形態規定以前の把握の仕方である。かくしてはじめに引用された一文中の「有形的労働」とは、歴史的形態規定以前の富、換言すれば使用價值としての使用價值、使用價值そのものの源泉としての労働、第一節にいわれる即目的労働過程において機能する労働であると考えられる。これはまさに生産的労働の本源的规定(第三の規定)にほかならぬ。スマイス自身をこゝでいう。「有形的にして生産的労働者」！スマイス經濟學の根本的特徴の一つは歴史的形態規定の立場に立脚しないことである。それはスマイスとかぎらず、およそ經濟學者がブルジョア的思维的の限界内にあるかぎり、おちいらざるをえない誤謬である。こゝに資本の立場にとつての特殊な規定である「生産的労働」の概念が全く自然的に——超歴史的の意で超社會的の意ではない——把握される理由がある。^(註27)そして第二節において我々が引用したところの、一見スマイスの第二の規定を示すと考えられる文章中においてこれを第二の規定としてのみ解するのにも多少とも抵抗を感じざるをえなかつたのはこのような本源的规定がそこに混入してゐるためではなからうか？「永續的對象物」とか「固定し實現する」とかいう言葉のいみには、且つスマイスによつて掲げられた生産的及び不生産的労働者の種類に

は、このような含蓄があるのではなからうか？ がこの點を更に論證するためにはスミスにおける労働過程論を明白にしなければならぬ。もとより、それはマルクスにおけるものと同じではなく、相違する點が多いであろうが、しかしスミスの全著述を通じてともかくスミスに特有な労働過程論の存在を見出しうるのである。しかも我々の推測にしてあまりなければ、それがヘーゲルの市民社會の分析（『法哲學』）において攝取され（とくに第三部人倫學、第二章市民社會、A 欲望の體系）、それを通じてマルクスの史的唯物論へと昇華していったといえよう。（詳論別稿）

だがこゝに注意されねばならないのは、このような歴史的なるものへの還元が、他面において、自然的なるものへの歴史的なるものへの還元をも同時に意味するということである。かくして元來ならば、労働過程論の立場において展開されるべきことが、こんどは逆に全く市民社會の言葉でかたられることとなる。想起せよ。スミスが人間の労働を人間と自然との間の交換と解していること（註28）。社會内部の分業を「大マニファクチャ」（註29）となすにしていること（註30）。資本の蓄積と土地の私有とに先立つ初期未開の社會状態における獨立自營の生産者の労働の成果が「賃銀」とよばれていること（註31）。等々。かくしてこゝに「有用的にして生産的労働」の意義が逆轉する。そこには、かゝる労働者數の「資本的貯財」（資本の意）の量と使用法とに依存する旨がしるされているではないか？ いまさきのべたところでは、資本主義的「生産的労働」の概念が自然的「有用的労働」の概念に還元されていた。しかるに、こんどは、自然的「有用的労働」の概念が資本主義的「生産的労働」の概念に還元される。歴史的形態規定の缺如とは、まさにこのような、無節操な融通無礙において成立する！ かくして、みぎの文章（といわず序論全體）が資本主義的エーテルのうちに沈湮する。こゝに富そのものは商品＝資本としてのみとらえられ、労働過程は資本制生産過程としてのみとらえられ、「有用的労働」はむしろ正しい第一の規定による「生産的労働」としてのみとらえられる。マル

クスがスミスのこの種の規定をとくに第三の規定としてとりあげず、第二の規定のうちに、更言すれば第一の規定のエレメンタルな形態としての第二の規定のうちに解消させたのは、この理由によるものである（註32）。しかもこの場合においてもスミスの文章、いな『國富論』の全展開のうちに第三の規定の存在していることは否定しがたいところであり、マルクスもその存在については氣付いていたと考えられる。（マルクスが第二の規定を論じる箇所をくわしくよめば、本來の第三の規定を第二の規定へ還元して解していることがわかる。この點詳論の餘裕がない。マルクスの記述をくわしくみられたい。）しからば何故にこれを無視したのであらうか？ 無視することの可能性と、その理由とは別箇の問題である。この點もいま詳論の餘裕がないが、こゝに我々はマルクスの學問的方法を見出すのである。我々は從來、經濟學の體系とその方法とがマルクスにおいてはいはば『資本論』の世界と『資本論』の立場という形で峻別されていることを屢々のべてきたが、こゝにおいても彼のいつもの仕方が採用されているのをみるのである。即ちマルクスは『資本論』のうちにおいては彼の方法というものについて記るさなかつた。『資本論』そのものが彼の方法をその具體化されたかたちにおいて示している（『資本論』の論理學）。したがつてスミスの生産的労働について論じた場合も、方法論的問題については論じることなく、むしろ資本主義經濟の論理となつて以後のところから批判を開始する。少くとも敘述様式そのものとしてはそういうかたちをとらざるをえない。そこに第三の規定についての説明の缺如した理由が見出される。それはマルクスとしては至極當然な、しかしこの彼のやりかたに習熟してないものには一見不可解な處置なのである。（この問題もいずれマルクスの學問論として詳論の機會をもちたいが、文字通りに簡単に解しないようにしていただきたい。）

それでは今日あらためてスミスを研究するものにとつてこの第三の規定の定立ということが、いかなる有効性を有

するか？ 最後にこの問題についてしておく。

生産的労働論はスミス経済學の結節點である。そのいかにしかるかは次にのべる如くであるが、したがってスミス経済學の全體的性格をしるには、その生産的労働論を理解することが第一の必要條件であり、また捷徑でもある。したがってまた、もしその生産的労働論の理解にあやまつていなければ、彼の経済學の全體的性格及びその學說史上の地位は把握しがたいであろう。(その意味で生産的労働は『資本論』における労働の二重性に比せらるべき『國富論』の樞軸である。)

スミスは通常經濟學の建設者とみなされている。しかしその理由付けにいたつては各人のみるところによつて相異つてゐるが、その主要なるもの一つとしてスミスにおいてはじめて素材視點と價值視點との區別及び前者から後者への移行がなされたことがあげられるであろう。重商主義者はいわば意識せざる價值視點、しかも交換價值の唯一獨立の存在としての金銀貨幣の立場にあつた。しかるに一方、重農主義者は重商主義者の流通の立場に對して生産の立場にあり、一步近代的科學としての經濟學にちかづいたのであるが、それは素材視點に立脚していた。しかるにスミスに至つてこの兩視點のいわば「綜合」がなされた。^(註34)そこに彼の經濟學の建設者としてのいみがみとめられる。經濟理論は、まず資本主義社會における數量化された現象形態を研究對象としなければならぬから、なによりも素材視點の克服と價值視點への移行とがそれにとつて要請されざるをえない。スミスはこれを實行した。

生産的労働論をみよ。スミスは正しく現實の質料的過程としての労働過程より資本主義的特殊な形態規定の立場に移行し、そこに視點をかざるることによつて正しい第一の規定をたてた。スミス自身は自覺していなかつたが、それに本來包攝さるべき第二の規定をもたてた。かくして又、彼は價值の實體としての労働の性質をかゝるものとして、即ち

生産的労働としての獨立的・歴史的・性格においてとらえた。いま第一の規定についてみると、剰餘價值を生産する労働が生産的労働であるという認識は、そこに剰餘價值論を胚胎しているといえる。スミスは労働の資本のもとへの形式的及び實在的包攝を事實上 (in der Tat) みとめていたと云える。^(註35)このようにして、彼の剰餘價值論が商品交換論のうちにもちこまれたものが、ほかならぬ彼のいわゆる「支配労働價值説」である。即ちスミスは労働と資本との交換 (資本流通、G-W-G) を商品と商品 (貨幣) との交換 (商品流通、W-G-W) と同一視する立場——スミスにおける資本の立場と商品の立場との混在。これはまた別箇に攷究さるべき問題である。^(註36)——より、資本としての商品の支配し購買する生きた労働量による評價が商品としての商品の價值尺度とみなされるにいたつた。こゝにそれ自體としてあやまれる支配労働價值説の眞意が存している。^(註37)で、また、こゝにスミス自身は意識していないが、彼による商品價值の實體の特殊な性質の把握がなされているのである。剰餘價值を生産するものとしての一般的性質におけるその労働の独自の社會的・性格の把握。いまもしスミスによつて資本の流通と商品の流通との區別がなされたならば、生産的労働の第二の規定が第一の規定より區別されたであろうし、またそのさい、商品を以て資本のエレメンタルな形態として理解したならば、第二の規定の適當な位置づけが行われ、かくして又、商品價值の實體の性質も更に立入つて、最初の基礎的規定が、即ち價值を生産するものとしての一般的性質におけるその労働の独自の社會的・性格の把握がなされたであろう。がスミスはそこまですまなかつた。^(註38)それへの展望をのこしながら、彼の商品分析は幾多の混亂のうちに挫折した。がともかく、彼による價值の實體たる労働の性質のこのような理解のうちに、彼の價值視點の確立をみうるし、ひとり彼の經濟學の前進的性格のみならず、彼自身の經濟學體系——『グラスゴー講義』より『國富論草稿』を経て『國富論』にいたる——内部における前進をみることが出来る。それは又、スミスにおよぼし

たフランス經濟學者の影響の問題をも正しく理解する「鍵」たるであろう。

フリードリヒ・リストがスミス經濟學の體系を「單なる價值の理論」(eine bloße Theorie der Werte) とし、特徴づけ、又これを「交換價值主義」(Tauschwertsystem) と名づけたのは、^(註39) このような特質によるものと考えられるが、しかしスミスの體系はいまだに完全に交換價值の體系、價值視點へと移行したのではない。かゝる移行の確立はリカードをまたなければならなかつた。スミスの經濟理論はいまだに質料的過程から完全に臍の緒をたちきつてはいない。彼が自然主義的分業論より交換論を導出せることを、農業においては自然も労働するといつてゐることを、總じてスミスにおける重農主義的殘滓を想起せよ。かくしてスミスの生産的労働の規定のうちにはこのブルジョア社會においては市民権をもたざる第三の規定がしのびこんでくることとなる。かくして又、價值の實體としての労働の性質が不明確となり、それと使用價值の實體としての労働(及び自然素材)との區別が見失われざるをえない。こゝにいわゆる「投下労働價值説」が、労働は富の源泉であるからして、したがつてまた價值の源泉でもあるといつかたちらにおいて成立することとなる。^(註42) こゝに生産的労働の二つ(三つ)の規定に對應する二つの價值尺度の存在と、その意義に留意せよ。^(註43) が第二の價值尺度論においてはスミスの價值論は前進ではなくしてむしろ停滯を示しており、彼以前の富の尺度と價值の尺度との混同の立場におちいつてゐる。かくしてスミスにおいて富(富裕)の立場と資本(商品)の立場との混在がみれ、それが彼の資本主義社會の分析を汚し、濁したといえる。彼が資本主義社會における富の増進下の階級對立を適確にとらえない、いなそれへの充分な見透しさえもなかつたのは、彼の生きた時代の制約とともに、(結局これに基因するといへ)彼の論理それ自體のうちにおけるこのような未成熟によるといえよう。

この點においてリカードのスミスに對する理論的優位がうかがわれるが、リカードにおいては重商主義に、そして——そう云つていゝならば——今日の「近代經濟學」にもちかいたころの、交換價值の自己疎外の觀點へと傾斜して^(註44)、この點においてはむしろ却て、スミスのたゞたゞしい分析のうちに、資本主義社會の内實の解剖としての充實性を見出すのである。例えばリカードの價值論は全くの尺度論であつて投下労働説であるにもかかわらずその理解は極度に形式的、皮相的である。スミスにおいてもこの點、リカードに類似してゐる面があるが、ともかく労働過程論に立脚することによる、實體概念そのものの事實上の存在を否定できない。しかもそれが前述の如く生産的労働の正しい規定を媒介とすることによつて、實體の性質の把握にまで事實上すすんでいたと臆測することができ。なお彼の價值尺度としての投下労働量の支配労働量への從屬的役割をこゝに想起せよ。

スミスに缺けてゐるものは質料的・労働過程・使用價值の立場||富の立場と價值的・價值増殖過程・剩餘價值||資本の立場との統一(自覺的綜合)の觀點であつた。それはマルクスに残された最大の課題である。マルクスはそれを遂行した。歴史的形態規定の觀點こそそれであり、『資本論』はその實現である。小稿における生産的労働の概念のあらたなる検討が、このような展望に多少とも途をひらきえたならば幸である。

(註24) Wealth. Vol. I. P. 2. 譯 第一分册 一八頁。傍點A。

(註25) *ib. P. 1.* 譯 一五頁。この句の下に、労働が富の原因を意味しないというレーザーの異説は全く採るにたりないが(E. Leser; Der Begriff des Reichthums bei Adam Smith. 1874. SS. 109-5.) マモンの如くこれを單に「實際的見地」と解するのちあやまり。(『正統派經濟學』一〇—二頁。)富の源泉としてスミスが労働のみをあげたのは(自然的要素の拾象)これを純粹に商品形態におきて把握した結果であるが、却て逆に價值の領域におきては、この立場の一貫を妨げられて

39° (K. Marx; Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L.-Institut. 1934. S. 47.) スミスは「經濟學に於ける最初の區別」の「富と價值との別」(M. Dobb; Political Economy and

Capitalism. 1946. P. 20.) において混同した。

(註26) 「剩餘價値の生産が資本制生産の決定的目的であるのと同様に、富の高度は、生産物の絶対的大ききによつてではなくて、剩餘生産物の相対的大ききによつて度量される。」(Kapital. Bd. I. S. 238. 譯「五八二頁」) 剩餘生産物の相対的大ききは剩餘價値率、更にその轉化形態としての利潤率におよびあらわれる。しかるにスミスは國民一人あたりの生活必需品等、ある「ハーカー」あたりの收穫を尺度として用いる。(Draft of the Wealth of Nations. W. R. Scott; Adam Smith as Student and Professor. 1937. 所收 P. 347. Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms. 1896. Pp. 164-5. 『國富論』の「より更に」 E. Cannan; A History. P. 12.)

(註27) 「資本主義的の生産形態を絶対的な生産形態と考へ、したがつて生産の唯一の自然的形態と考へるブルジョアの偏狭だけが、資本の立場からみた生産的労働と生産的労働者とは何であるかという問題と、一般に生産的労働とは何であるかという問題とを混同し、したがつて、一般に生産する労働、ある生産物またはある使用價値を、總じてある結果をもたらす労働は生産的である、という同語反復的な答に満足することができるのである。」『直接的生産過程の諸結果』(四四一頁。)

(註28) 「労働は、あらゆる物に對して拂われた最初の價格、本源的購買貨幣 (the first price, the original purchase-money) であつた。世界におけるあらゆる富がはじめて買われたのは、金または銀を以てではなくして、労働を以てであつた。」(Wealth. Vol. I. Pp. 32-3. 譯「第一分冊」六八頁。)

(註29) ib. Bk. I. Ch. I. の批判 Kapital. Bd. I. Kap. XII. Abschn. 4.

(註30) ib. Bk. VIII.

(註31) 名を Wealth. Vol. I. P. 325. 譯「第二分冊」一二七—一八頁、には「同趣旨のことのべられているが、そこでは「生産的労働者」とのみを、且つ生産物の價値にのみを指す。」

(註32) だからして、マルクスは、さきの「有目的にして生産的なる労働者」云々の一文について、これをむしろ資本の立場への

還元として述べている。「A. スミスは、商品生産一般を資本制商品生産と同一視する。生産手段はもと『資本』であり、労働はもと賃労働であり、したがつて『有目的にして生産的なる労働者の数は、……如何なる場合においても、彼等を働かせるために使われるところの資本的貯財の量に比例するものである。』(緒論「一二頁」) 一言で云えば、労働過程の相異なる諸要因——對象的及び人的な——が初めから資本制生産時代の扮装で現われる。」(Kapital. Bd. II. S. 391. 譯「七三四頁。なおこゝでマルクスが資本の立場に對立させているものが労働過程の富の立場ではなくして商品の立場である點に注意。) (更にマルクスは劈頭の一句に $V+M$ ドラマを嘆き出してさへいる。id. S. 379-80. 譯「七一—四頁」) マルクスの解釋に對立するものがキヤナンの解釋である。キヤナンは右の句に註して、こゝでは生産的労働が有目的労働の意に解されているという。(名を P. 341. Note 1. を参照。更々 A History. P. 38. も見よ。) しかしキヤナンの生産的労働論の見方が維持しがたいことは、さきの(註16)で述べた如くであつて、こゝに「有目的」とは——キヤナンにとつては——おそらく非物質的效用の生産をも包括するの意であろう。ちなみにレーサーはスミスの富 (wealth = riches = opulence) の概念が「財産 (Fortune) とは異り——物象概念 (Sachbegriff) ではなくして状態 (Zustand) を意味する」といふが (Begriff. SS. 5-7.)、それはスミスの一面における富を富そのもの (使用價値物) として把握する立場の反映であろう。蓋しその商品に資本形態は全く物象概念であるから。

(註33) 藤塚知義氏はスミスの生産的労働論のうちにマルクスにならつて二つの規定のみを見出される。(『アダム・スミスにおける「生産的労働」の概念について』「經濟評論」昭和二四年六月。) このような原則的には正しい立場から三つの規定をみとめる大内力氏『生産力理論におけるスミスとリスト』「社會科學研究」第二號、四五頁。) 及び越村信三郎氏(同氏著『スミス經濟學說』一二二—三二頁。) の見解を拒否されているが、越村氏のは別として、大内氏とは問題意識の上でズレがあるようであり、大内氏はむしろ我々のとりあげたに よりちかひ。高島善哉氏は藤塚氏と同じく二つの規定のみをあげる。氏は我々のいわゆる「第三の規定」を以て商品の使用價値、「第二の規定」を以て商品の價値を生産するものとみなされることによつて、結「生産的労働」にしよう

局、商品を生産する労働の二つの側面として統一される。(『アダム・スミスの市民社會體系』二〇九—一六頁。『スミス國富論講義』第二分冊、四五—五三頁。第四分冊、一一—一三頁。)しかし生産的労働の規定における質料的要素を重視強調される點において、藤塚氏と異り、あるいみで我々の見解にちかいと云えまいか?

(註84) 「剰餘價値の規定は、勿論價値自身が把握された形態に依存する。それ故に、重金主義及び重商主義においては、それは貨幣として表われる、重農學派においては、土地の生産物として、即ち農業生産物として、最後に、A・スミスにおいては、商品一般として。重農學派が價値の實體に論及するかぎりにおいて、價値は彼等にとつては、全然單なる使用價値(物質、素材)に分解する、同じく重商學派にとつては、單なる價値形態、即ち生産物が一般的、社會的労働として現れる形態、即ち貨幣に分解する。A・スミスにおいては、商品の二つの條件、使用價値と交換價値とが綜合される。……A・スミスは、重農學派に對して生産物の價値をブルジョアの富にとつて本質的なものであるとして再び樹立する、しかし他方において、重商學派にとつて價値が現われる單なる幻想的形態——金及び銀の形態——を取り拂う。」(Theorien. Bd. I. SS. 280-1. 譯、二八五頁。)

(註85) スミスの剰餘價値論について、藤塚知義氏はこれを絶對的剰餘價値論と解し(『新しい『アダム・スミス問題』』の提起)「經濟評論」昭和二五年一月、九二頁)、内田義彦氏は相對的剰餘價値論と解されているが(『イギリス重商主義の解體と古典學派の成立』、潮流社『經濟學全集』、三五、六九頁)、事實上この兩形態がみとめられていたのではないか? 彼は『國富論』第一篇第六章及び第八章の冒頭において、「資本の蓄積と土地の私有」以後、利潤や地代が生産物中より排除されるとの事によつて労働の資本のものと形式の包攝を (P. Portolano; Les Mouvements du Salaire et du Profit chez Adam Smith. 1935. PP. 23-4) また労働生産力の増進による利潤の増大をのべることによつて労働の資本のものと實存的包攝を(後者については)「Wealth. Vol. I. P. 88. 譯、第一分冊、一七—二二頁、およびマルクスはこの箇所を「スミスの本來のより深い見解」——相對的剰餘價値論——を見出した」として(Theorien. Bd. II. Tl. I. S. 84. 大森義太郎氏譯、九三頁。)「キヤーターウッドはこゝに「近代的貨幣理論」の最大の接近をみる。」(B. F. Catherwood; Basic Theories of Distribution.

1939. PP. 33-9.) なお、Wealth. ib. P. 242. 譯、第一分冊、四五七—八頁、にも同趣旨の文章がみられる。)をみとめている。しかしスミスにおける富裕の觀點がこのようなブルジョア社會に固有の論理(生産力の發展に原因する社會的諸矛盾)の理解をさまたげている。とくにそれは『國富論』以前の著作にうちじるし。例えば『國富論草稿』(Draft. PP. 325-38. その批判、内田義彦氏、前出、二六一—三六頁。『國富論』については、とくに第一篇第一章の結論の部分(Wealth. Vol. I. PP. 247-50. 譯、第一分冊、四六六—七二頁。)をみよ。スミスは所得の關係を嚴格に價値視點、價値法則の前提において論じてはならない。(労働の眞實價格及び土地の眞實地代「素材視點」、需給の攪亂的作用「競争」、そのいわゆる「利潤」は多分に、前期的獨占利潤であり、「利潤率の低下」は獨占の解體の反映であること、など。)この結論によつて、自然的秩序と歴史的秩序との矛盾、調和の放逐をみとめる見解 (M. Anoyaut; L'Etat progressif et l'Etat stationnaire de la Richesse nationale chez A. Smith et St. Mill. 1907. P. 50.) は早計である。

(註86) 最近、藤塚知義氏はこの點にあたり「スミス問題」を提起されている。前記「新しい『アダム・スミス問題』の提起」。(註87) Theorien. Bd. I. SS. 146-3. 譯、一五二—一五頁。

(註88) 「アダム・スミスがとりあげた商品はもともと商品資本(これは商品の生産に消費された資本價値のほかに剰餘價値を含む)であり、かくして資本制的に生産された商品であり、資本制生産過程の結果である。だから資本制生産過程が、したがつてまた、この生産過程に含まれる價値増殖(および價値形成過程)が、あらかじめ分析されねばならなかつたわけである。ところで、この過程の前提そのものはまた商品流通であるから、したがつて、右の過程の説明はまた、それとは獨立して先行する商品分析を必要とする。A・スミスが『大乗的』にたまたま正偽をえているかぎりでも、彼はつねに商品分析すなわち商品資本分析の際にのみ價値生産を顧慮してゐるのである。」(Kapital. Bd. II. SS. 391-2. 譯、二三四—六頁。)

(註89) F. List; Das nationale System der politischen Ökonomie. 1841. Kap. 31.

(註90) その批判、Kritik. S. 48. 譯、七四頁。P. M. Sweezy; The Theory of Capitalist Development. 3. ed. 1949.

「生産的労働」について

PP. 23-5. E. Roll; A History. PP. 156-7.

(註14) Wealth. Vol. I. PP. 343-4. 譯「第二分冊」一五九—一六一頁。リカードによるその批判。D. Ricardo; Principles of Political Economy and Taxation. 1817. Gonner's Ed. PP. 53-4. Note 1. 堀尾夫氏譯「六三一—五頁。マンヌンによるその批判。Kapital. Bd. II. SS. 362-3. 譯「六七八—一八〇頁。

(註15) 『國富論』第一篇第五章冒頭の「インダグレーション。リカードによるその批判。Principles. Ch. XX.

(註16) マンヌンは——我々の立場とは對蹠的な立場からではあるが——マンヌンの生産的労働のうち三つの規定(形式的には我々のそれとほぼ符合)を見出し、「うち」「生産的労働の貯蔵説」「storage" version」(「我々の第三の規定)と投下労働價值説」「價值説」「value" version」(第一の規定)と支配労働價值説とを關聯せしめるのは、極めて興味深き。(H. Myint; Theories of Welfare Economics, 1948. Ch. V.)

(註17) マンヌン、それは積極的の意味である。(Marx; Zur Kritik der Natlialökonomie. Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844. Marx-Engels Gesamtausgabe. Abt. I. Bd. 3. S. 108. 『マ・ン・全集』第二十七卷。Theorien. Bd. II. Tl. I. SS. 312-3. 大森義太郎氏譯「三一八頁。)」とリカードの「ときとして」人類の言葉で語らる。「人類の幸福」(Principles. P. 112. 譯「一三二頁。)」「全體の全般的幸福」「一般的福利」(P. 114. 譯「一三三頁。)」「人類の文」(P. 77. 譯「九二頁。)」「國の富と人口との發達」(Economic Essays. Gonner's Ed. 1923. P. 252. 大川二司氏譯「農業保護政策批判」四五頁。)」「そもそも資本の所有を維持は目的であるのか。手段であるのか。手段であること疑ふなす。」(PP. 238-4. 譯「九七頁。)」

資料

鐵道運賃の性格に就ての論争 (一)

——タウミング對ピグー——

増井健一

一八九一年七月の Quarterly Journal of Economics 誌上に Frank William Taussig の論文「鐵道賃率論」の一寄與(A Contribution to the Theory of Railway Rates)が載せられた。その趣旨は、鐵道の輸送費用は多分に結合費の性質を帯びており、そのために鐵道運賃は主として結合費理論によつて説明し得る、というのである。此の「鐵道運賃に關する結合費理論」はその後交通學者の間に多くの支持者を得、又 Taussig 自身一九二二年刊の大著「經濟學原理」(Principles of Economics)中の「鐵道」及び「鐵道問題」の章において同趣旨の事を一層組織的に述べたのであるが、翌一九二二年に Arthur Cecil Pigou の最初の大作「富と厚生」(Wealth and Welfare)があらわれた。Pigou はその中で、鐵道運賃を説明するために結合費理論を以てするのは全く誤りであつて、差別獨占の理論こそ眞に採用されるべきものであるとした。Taussig は

鐵道運賃の性格に就ての論争

一九二三年二月の Quarterly Journal of Economics 誌上に「鐵道賃率と結合費、再論」(Railway Rates and Joint Cost Once More)を載せて自説を擁護し、續く同年五月及び八月の同誌上で Taussig と Pigou との間で二回にわたる論争が行われた。然し論争後、Pigou の著書「厚生經濟學」(The Economics of Welfare) (一九二〇年刊)及び Taussig の著書「經濟學原理(改訂版)」(Principles of Economics) 一九二二—一九二三年刊、によつて見るに、兩者それぞれ若干の意見修正を行つてはいるが、根本的には依然自説を主張してゆづらなかつたのである。

以上が、古典學派の流れをくむ理論經濟學界の二巨星の間で行われた首題論争の経過である。今日より見る時、此の論争は既に古典的と形容さるべき感があるが、兩者の所説は、ともに、今日の交通論に深く影響しているにも拘らず、此の論争の全面的な紹介は行われていない様であるから、以下、此の論争の内容を要約して紹介しようと思ふ。

I. タウミング「鐵道賃率論」の一寄與 (QJE 誌、一九九一年七月號、一二三乃至一四四頁)

此の論文は、まず、鐵道運賃に關する Coon 説の反駁に始まる。Taussig は次の様に見える。Coon 説によれば、鐵道賃率は、鐵道輸送というサービスの提供するために要する費用に

四九 (三四五)